



特集

ドキュメンタリー映画は
記録の宝庫。

研究室訪問 / 大学院教育実践研究科

地震被害の地理学的分析と
学校や地域の
防災教育を強力支援。

ドキュメンタリー映画は 記録の宝庫。 映画祭開催地の大学として その学術的価値を 立証する第一歩。

人文学部教授

阿部宏慈



人文学部教授

山崎彰



人文学部教授

中村唯史



人文学部教授

高橋和

「第13回山形国際ドキュメンタリー映画祭」が開催された今年、本学の教員ら8人の研究者が1冊の本『映像の中の冷戦後世界』を出版した。映画祭の過去の応募作品を資料として冷戦後のドイツ、ロシア、東欧各国の社会、文化を論じている。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」との協定締結をきっかけに、人文学部では「山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー」の貴重な映画の調査研究に乗り出した。今回の出版はその成果の一端で、ドキュメンタリー映画が研究者にとっていかに興味深い資料であるかを立証して見せた。ここ山形にしかない映像という貴重な財産をより多くの研究者に活用してほしいと、著者3人が、映画資料の貴重さや魅力を語り合った。





山形ドキュメンタリー フィルムライブラリーとは

山形国際交流プラザ3階にあり、山形国際ドキュメンタリー映画祭に応募された作品を中心に、8,000本を超える貴重な映像資料が収蔵されている。ライブラリー内でのみ視聴可能。



フィルムライブラリー収蔵作品を研究したものをまとめた書籍群。一番右が今回出版された『映像の中の冷戦後世界』。山形大学をはじめ東京大学や城西大学等の研究者8人による共著。

山形大学になにができるか 膨大な映画作品の調査研究に着手

阿部 本日はお集りいただきありがとうございます。人文学部では、4年前から、山形国際ドキュメンタリー映画祭との連携により、映画祭のフィルムライブラリーに収蔵されたドキュメンタリー映像作品の研究調査を行ってきました。山形国際交流プラザ3階にある山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーには、映画祭に応募された作品を中心に8,000本を超える映像資料が収蔵されており、それらはライブラリーにおいてのみ視聴が可能で、多くは英語字幕がついているだけ。それらが製作された時代や国、地域、社会や人々の現状を伝える資料として、大変重要な資料となっています。特に、それらの国や地域を研究する研究者にとっては関心も高いだろうと考えられます。そこで、山崎先生の発案で人文学部の教員を中心に学術的なプロジェクトを立ち上げたわけですが、その具体的な中身について山崎先生にご説明をお願いします。

山崎 本学と山形国際ドキュメンタリー映画祭の協定締結を受け、映画祭の事務局や理事からフィルムライブラリーにある膨大かつ貴重な映画の研究調査という話をいただきました。映画の目録を見ると、確かに大変貴重な映画が多かったので3つのカテゴリーで調査研究することにしました。①現在の日本の

若者の状況や教育を扱った映像、②日本社会の中の民族的マイノリティを取り上げた映画、③東欧、ロシア、ドイツの社会変化に関する作品です。特に、③に関しては我々の専門分野でもあり、第1回山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催された1989年に東欧革命とベルリンの壁の崩壊があり、映画祭と社会変革の歴史がリンクして大変優れた作品が多く出品されています。それらを資料として出版されたのが『映像の中の冷戦後世界』です。これだけのドキュメンタリー映画がそろっているのは、日本では山形だけです。

阿部 世界的に見てもないかもしれませんよ。送り出した国でさえ失ってしまったような映像もあるでしょうから。予想以上に貴重な映像資料の調査研究から得られた、具体的な成果について伺います。まず、国際関係論が専門の高橋先生はいかがですか。

高橋 成果というよりも、新たな発見が3点ほどありました。1990年代は社会主義から市場経済への移行期で、体制変換により人々の生活レベルでどんな変化が起こるのか、具体的に映像の中で知ることができました。社会主義体制下では扱われることのなかった民族問題等が掘り起こされることで、被害者・加害者の立場がひっくり返ってしまうような側面もあり、新しい視点を提起してくれました。また、バルカン諸国の映画にはユーゴスラビアが解体するときの紛争の作品が多く、

そこには“なぜ自分たちは、昨日までの隣人と戦わなければならないのか”といった疑問が生まれています。それだけに政治レベルで休



阿部宏慈

あべこうじ ●人文学部人間文化学科教授 / 専門はフランス文学、フランス文化論、映像論、表象文化論など。山形国際ドキュメンタリー映画祭の理事を務めるなど学外での活躍も顕著。

戦・戦後処理が行われても、心理的な部分での和解の難しさがテーマとされているものが多いですね。そして、とりわけ興味深かったのは『第4の席』というコンボ紛争終結の舞台裏に迫った作品で、パワーを持たない国の発言力の無さが露骨に現れていて、非常に貴重な資料だと感じました。一般的なマスコミ報道とはまったく違う新しい発見がありました。

阿部 なるほど。政治的な側面から見るとそういう発見があるわけですね。私は、どうしても映画としての完成度の方に目がいってしまいますけどね。次は、ロシア文化・文学が専門の中村先生はどうご覧になりましたか。
中村 私は、これまでドキュメンタリー映画はあまり観てきませんでした。ソ連時代のドキュメンタリー作品は、プロパガンダとしての側面が強かったこともあり敬遠していたのです。でも、山崎先生からこの話をいただいて、初めてドキュメンタリーアーカイブと向き合いました。ソ連がぐらつきはじめた1989年からの映画には、従来の体制下で曖昧にされてきた諸問題が顕在化していく過程が表れていて面白かったですね。1995年の

フィルムライブラリーは 素晴らしい宝庫。——中村

フィルム資料庫

ドキュメンタリー映画の秀作を、次世代に引き継ぐ貴重な文化資源として収集・保存するために資料庫の空調には万全が期されている。研究者垂涎の貴重なフィルムも多数収蔵されている。



図書コーナーと ビデオブース

ドキュメンタリー映画に関する図書を含めた映画関連図書をそろえた閲覧自由な図書コーナー。また、ビデオブースでは映画祭に応募のあった作品を無料で鑑賞することができる。

- 第5回山形ドキュメンタリー映画祭
- 第6回山形ドキュメンタリー映画祭
マカオが中国に返還
- 第7回山形ドキュメンタリー映画祭
アフガニスタン紛争
アメリカ同時多発テロ事件
マケドニア紛争
- 第8回山形ドキュメンタリー映画祭
アメリカ軍がイラクに侵攻
- 第9回山形ドキュメンタリー映画祭
チェコ、スロバキア、
ポーランド等EU加盟
- 第10回山形ドキュメンタリー映画祭
ルーマニア、ブルガリア
EU加盟
- 第11回山形ドキュメンタリー映画祭
ユーロ経済危機
- 第12回山形ドキュメンタリー映画祭
東日本大震災
- 第13回山形ドキュメンタリー映画祭

今回は、本学主催で「東欧ドキュメンタリー映画の現在～冷戦終了後の世界」と題して講演会を開催しました。映画祭の第1回大賞作品はラトビア映画で、第2回はハンガリー映画、東欧ドキュメンタリー映画の占める割合が大きく、当初10年は特に勢いがありましたからね。講演会では東欧ドキュメンタリー

歴史的背景がわかると もっと面白い。——高橋

映画ということで、東京大学の小椋先生、城西大学の飯尾先生、そして本学の高橋先生にそれぞれ専門としている国のドキュメンタリー映画についてお話いただきました。熊本や東京からの来場者もいらしたほど好評だったようです。

中村 初日は満席だったと聞いて少し驚きました。私たちが思っていたよりもロシアやドイツ、ハンガリーなどのドキュメンタリー映画に対する関心は高いのだと感じました。

高橋 私はドキュメンタリー映画を観る際には、その国や地域の歴史的背景を知っておくと絶対に面白いというようなこともお話ししました。このシーンにはこういう意味が込められているとか、こういうことを批判しているんだとか、スルーしないで理解できるともっと楽しいと。

阿部 来場者の反応はどうでしたか。

高橋 わかりやすかったみたいですよ。

山崎 ポーランドやチェコ、ハンガリーなど、

関心がないとどの国の映画も同じように見えますが、専門家が観るとそれぞれの国の映画事情が違って、その背景の中で1本1本創られていることがわかってきます。



中村 唯史

なかむらただし ●人文学部人間文化学科教授 / 専門分野はロシアおよびソ連圏の文学・思想・文化。共著『映像の中の冷戦後世界』では、第1部ロシア研究「事実と記録のあいだ」を担当。

阿部 我々も専門家の話を聞きながらだともっと面白いことが沢山ありそうですね。

高橋 ブルガリア研究の菅原先生とも「これ、解説があった方が絶対面白いよね」と話していたんですよ。そうじゃないと場面の真意が理解できない場合がありますから。

阿部 まったくその通りですね。では最後に、今後のライブラリーの活用方法、山形大学としてどんなことが可能なのか、将来的な見

通しなどについて、みなさんから一言ずついただいて締めくりたいと思います。

中村 私は、最初それほど強い情熱もなく参加したのですが、観ていくうちにフィルムアーカイブは本当に素晴らしい宝庫なのだと思えました。研究者の立場から観るのもよし、冷戦前を知る世代が回顧的にこの20年間のフィルムを捉えるのもありでしょう。また、学生たちは別の見方をするのかもしれない。膨大な本数の映画ですから、誰もすべ

てを観ることはできませんが、それぞれの関心に合った作品を観ることで貴重な経験になると思います。

高橋 私は国際関係の立場から、ドキュメンタリー映画を事実と重点をおいてみると面白いと友人に話したところ、インドネシアの研究をしている友人が山形までアーカイブを見に来てくれて「面白いね」と言っていました。せっかく貴重な財産が私たちの身近にあるわけですから、山大プロジェクトとして「いっしょに研究しませんか」と日本各地、世界各国の研究者に呼びかけ、アーカイブをフル活用したいですね。

山崎 歴史学では映像記録の学術的な活用手法が確立されていませんが、フィルムライブラリーは間違いなく新しい研究方法が試せる場です。日本中の研究者に活用しても

らえるよう声をかけていきたいと思っています。また、教育という観点からは、本プロジェクト

の調査を手伝ってくれた学生9名のうち4名が留学することに着目すると、今後、外国の文化や政治、社会を学ぼうとする学生たちにとっても、フィルムライブラリーは有益だと思います。

阿部 教育機関としてフィルムライブラリーの学生への有益性にまで言及いただき、締めくくるにふさわしい内容となりました。今後さらなる成果に期待いたします。本日はお忙しいところ本当にありがとうございました。

この本は非常に
貴重だと思います。——阿部

第4回映画祭上映作品 (1995年)



記憶と夢

監督:リン＝マリー＝ミルバーン / オーストラリア
ヨハンナというチェコ女性の生涯を綴った作品。彼女はチェコスロバキアで初めての女性モーターサイクル・レーサー、ジャーナリストとして活躍した。第2次大戦中のドイツ占領下で恋人は殺害され、彼女自身も苦難の道を歩む。

第5回優秀賞受賞作品 (1999年)



掃いて、飲み干せ

監督:ゲルト・クロスゲ / ドイツ
社会主義時代にライプツィヒの道路清掃人であった3人のドイツ統一後の生活を追った作品。道路清掃作業も機械化され、彼らは解雇されている。出口の見えない彼らの人生を、モノクロームの画面により叙情的に描き出している。

第11回映画祭上映作品 (2009年)



オート*メート

監督:マルチン・マレチュク / チェコ
環境保護を訴えて、自動車の抑制を主張し、ブラハの街を元気にする社会運動「オート*メート」。政治家たちとのやりとり、グループでの自転車走行、討論会など。ブラハ初の「ノー・マイカー・デー」は成功するのかわ?

人文学部

Faculty of Literature and Social Sciences

オープンキャンパスで学部説明会等を開催!



小白川キャンパスでは8月3日(土)にオープンキャンパスを開催しました。

人文学部では、人間文化学科・法経政策学科の「学科説明会」に加え、6名の教員陣による様々な分野の「模擬講義」(ジブリ作品と日本宗教、日本語教師ノススメ、目の欺き、高校生の契約生活?、日本のこれからのために昔のことを考える:日本の外交と戦争、注目の経営学:あなたが日本のスティーブ・ジョブズになるかも!)、教員や現役大学生と直接話ができる「先生との

つどい・在学生とのつどい」、大学ならではの特殊教室を巡る「教室見学ツアー」及び「編入学説明会」を開催し、ご来場いただいた高校生や保護者の皆様に、人文学部の雰囲気を体験していただきました。

今年度も約1,500名の方にお越しいただき、大盛況となりました。

地域教育文化学部

Faculty of Education, Art and Science

山形市食育フェアで創作料理を提供



食環境デザインコースでは、「調理学実習」「給食経営実習」等の授業の一環として、地域と連携した実践的活動を行っています。昨年に引き続き、今年も山形市から依頼を受け、山形市特産の「蔵王かぼちゃ」を使ったスイーツや軽食

をグループに分かれて開発し、学内のコンテストにより出品料理2品を決定しました。その後も改良・試作を重ね、11月9日(土)に霞城セントラルで開催された山形市主催の食育フェアで、完成した2品「かぼトンピラフ」と「蔵Oh!!なめらかかぼちゃ」を約300名分調理し、提供しました。当日は山形市長も試食に訪れ、学生代表が料理の説明をしました。

教育実践研究科

Graduate School of Teacher Training

ひらめき☆ときめきサイエンスを開催

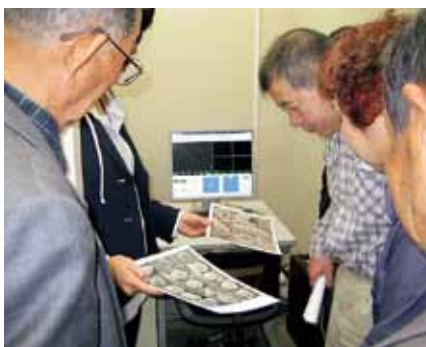


11月2日(土)、日本学術振興会による社会還元事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」のプログラムとして、大澤弘典教授が『算数・数学マジックを楽しもう!~「なぜ?」&「なるほど!」の世界~』を実施しました。山形県内の小学5年生から中学2年生まで20名(限定)が参加しました。参加した子供たちみんなで色々な算数・数学マジックのカラクリを見破り、新たなマジックづくりにもチャレンジし、大変好評でした。

理学部

Faculty of Science

理学部公開講座「ノーベル賞の科学—多様な細胞の形と働き—」を開催



10月19日(土)・20日(日)の2日間にわたり、公開講座「ノーベル賞の科学—多様な細胞の形と働き—」を開催しました。大学祭「八峰祭(やつみねさい)」との同日開催となり、たくさんの方が訪れる賑やかな雰囲気の中、行われました。

今回の講座は、2012年、京都大学の山中伸弥教授が人口多能性幹細胞(iPS細胞)の研究でノーベル賞を受賞したことになんで、「細胞」をキーワードに、様々な生物の細胞を対象として研究をしている3名の

先生方に、多様な細胞の形や働きについて、最新の研究成果の内容を盛り込みながら講義していただきました。

受講者からは、「最新の科学情報が得られて楽しかった」、「珍しい画像を見ることができて良かった」、「細胞を車と時計に例えての話が分かりやすかった」などの感想が寄せられ、とても好評でした。

また、当日は理学部全5学科による研究室公開も行われ、八峰祭を訪れた方やOBの方にもご来場いただき、大変好評でした。



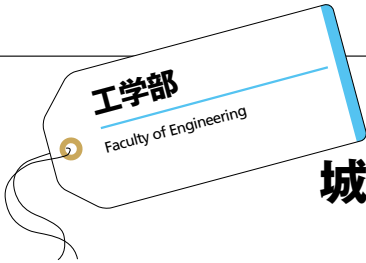
医学部公開講座「超高齢化社会のリハビリテーション—在宅医療に必要な基礎知識—」を実施

医学部では、9月7日(土)に公開講座「超高齢化社会のリハビリテーション—在宅医療に必要な基礎知識—」を実施しました。

当日は、100名の募集人数を大幅に上回る132名の参加がありました。本公開講座では、学内外から4名の講師を迎え、①脳血管障害、運動器障害のリハビリテーション—急性期から回復期まで—、②在宅リハビリテーションの実際と問題点(認知症、嚥下、骨粗鬆症問題を含む)、③在宅介護での環境整備、④リハビリテーション

地域連携の現状と今後の課題—災害時の経験から見えてきたこと—(廃用症候群を含む)をテーマに講演が行われました。

講師から、超高齢化社会を迎えた本邦におけるリハビリテーションの実際や問題点等についての概説があり、実例を踏まえた熱心でユーモアのある講演に会場が時折笑い声に包まれるなど、盛会のうちに終了しました。

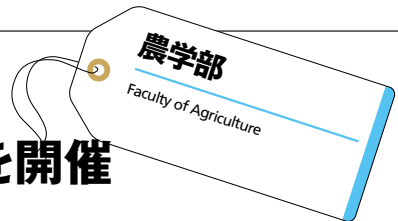


城戸淳二卓越研究教授が紫綬褒章を受章

平成25年秋の褒章において、山形大学大学院理工学研究科城戸淳二卓越研究教授が、紫綬褒章を受章しました。紫綬褒章は学術や芸術の分野で著しい業績を残した人に贈られるもので、今回は16名が受章しました。城戸教授は大阪府出身、早稲田大学卒業後、米国ポリテクニク大学大学院にて博士号を取得し、平成元年より山形大学にて研究を重ねてきました。平成5年、世界で初めて白色有機EL(エレクトロ・ルミネッセンス)素子を開発し注目を集めました。

さらにその後、実用化レベルにまで性能を高め今日の世界的な製品開発に貢献したことが高く評価されました。

有機ELとはプラスチックのような有機物に電流を通して自発光させることができる発光素子で、TVなどのディスプレイに使う際バックライトを必要としないため、極限の薄さを実現することが可能になります。また、省エネルギーかつ紫外線が出ないなどの優れた性質を生かした照明機器への応用も進んでいます。



第2回山形大学ビーチサッカー大会を開催

9月21日(土)、鶴岡市由良海岸にて「第2回山形大学ビーチサッカー大会」を開催しました。当大会は昨年度から始まり、山形大学校友会支援事業として農学部と農学部鶴窓会が合同事業で企画しました。

昨年度は雨天のため屋内での開催となりましたが、2回目となる今回は最高の秋晴れとなり、小白川キャンパス、工学部、農学部から12チーム、約100名の学生が参加し、白熱した試合を繰り広げ、楽しく汗を流し、学部間の交流を深めることができ

ました。

また、昼食にはバーベキューや、内陸・庄内のそれぞれの芋煮(しょうゆ・みそ)や、農学部農場産米のおにぎりなども振舞われ、山形県の秋の味覚を楽しみました。

熱い戦いを制したのは、人文学部チーム「真夏のタンクトップ男子」、準優勝は工学部チーム「もうお前を泣かせはしない!」、第3位は工学部チーム「ケンツ」となりました。



防災教育の充実は、 3.11後に生きる私たちの責務

1978年宮城県沖地震、2011年東日本大震災等、村山先生は近年の地震災害の建物被災の多くが造成宅地で発生している点に着目し、地震に対する地盤条件の把握が重要な課題であるとして調査・研究に取り組んでいる。また、10年ほど前から防災教育にも力を入れているという。これからの防災は、防波堤等のインフラ整備といったハード面だけでは不十分であり、防災教育や訓練の徹底等のソフト面の充実が不可欠となってきているからだ。家具の転倒防止やベッドの配置換え等、家庭レベルですぐできる防災行動をはじめ、防災教育によって回避できる被害も少なくない。



村山良之

むらやまよしゆき ●大学院教育実践研究科教授/山形県出身。東北大学理学部卒業、大学院DC中退。東北大講師を経て本学着任。3.11以前から防災教育および学校防災支援に尽力。ネパールの防災教育にも協力している。



東日本大震災の被災事例。造成宅地では、地盤変状により建物が傾斜・変形するケースが多く見られた。

2007年に仙台市内の小学校で実施した防災教育を受けた子どもたちを、震災後に追跡調査したところ、小学校での防災教育が3.11の時に生かされたかとの問いには概ね「役立った」との結果が得られた。以前は、防災教育の重要性を呼びかけて授業をさせてもらうという構図だったが、震災後は山形県内の学校や町内会、公民館等、各方面から防災管理や防災教育に関する問い合わせや支援要請が寄せられるようになった。

学校における防災管理と防災教育の充実が強く求められていることを受けて、鶴岡市では市独自に「防災教育アドバイザー派遣

事業」を実施し、小・中学校の防災教育を支援している。村山先生は昨年、今年とそのアドバイザーを務め、学校防災マニュアルの作成にも携わった。こうした取り組みは他の地域でも始まろうとしている。

自分の町を知り、自分を守る ポジティブな防災教育

村山先生の小学生向け防災教育のポリシーは、ポジティブであること。単に「あぶないよ」と警告するのではなく、まずは自分たちの町をよく知り、良いところに注目した上で、危険な要素にも気づかせて注意を促すというもの。そのもっとも顕著な実践事例が、東北大学等と共同で東日本大震災津波被災地にある石巻市立鹿妻小学校で行っている「復興マップづくり」。4年生の全児童がまち歩きをして住宅やお店、公園等をチェックし、震災後に新しくできたもの、震災の被害を受けたが直されたもの、建設中、修理中のもの等に分類。瓦礫がなくなって整理された更地は復興のスタートとしてポジティブに表現。その一方で、危険や不安に

東北はもとより、遠くネパールまで、
地理的条件に合わせた防災教育を展開。

地震被害の地理学的分析と 学校や地域の 防災教育を強力支援。

村山良之 大学院教育実践研究科 教授

地理学が専門の村山良之教授は、防災教育や地形改変地の土地条件評価等を研究テーマとしている。東日本大震災の発生以前から小・中学校を中心に防災教育や学校防災支援に取り組んできた。3.11以降は、防災教育の講演等の依頼が相次ぎ、防災意識の高まりを実感している。3.11の教訓を風化させることなく次の災害に備えるべく、学校や町内会などの要請に応じて防災管理・防災教育支援に取り組んでいる。

思う場所やものについてもしっかりカバーしている。防災教育にとどまらず、この活動を通して地域の震災経験を整理する、地域の未来について考え、復興のプロセスに参加する、自分が育った地域に誇りを持つといった狙いも込められている。

さらに、村山先生のポジティブ防災教育は日本を飛び出し、海を越えてネパールへ。高い山々が連なるネパールは、崖崩れや土石流、地すべり等土砂災害の頻発地帯。そこで、長年ネパールの土砂災害に取り組んでいる八木浩司教授と共同で土砂災害から身を守るための紙芝居を制作し、現地の大



村山先生は、鶴岡市の防災教育アドバイザーに就任。写真は今年7月の鶴岡市立三瀬小学校での様子。


学院生の協力を得てネパール語で子どもたちに披露。自然の異変に耳を澄まし、素早く高い所へ避難するようにと呼びかけた。

教師に求められる防災知識、 本学教職大学院では必修科目

東日本大震災の経験を踏まえて、学校の防災管理に関する見直しや防災教育の必要性が浮き彫りになっているが、本学大学院教育実践研究科(教職大学院)では、2009年の設立当初から「学校の安全と防災教育」を必修科目として設定している。子どもたちの命を預かり、地域の防災拠点となる学校を預かる教師にはより高い防災知識や防災管理能力が求められるからだ。さらに、学校の立地条件によっても臨機応変な対応が求められるため、海からの距離や地形、地盤といった自然や土地を理解しておくことも重要だ。学校や地域の特性に応じた防災マニュアルを作成しなければならない。「今後は、大学の教員養成課程でも防災に関するカリキュラムを充実させる必要があるのではないだろうか」と村山先生。さらに、子

どもたちへの防災教育について、特別な授業にこだわらずに普通の教科や科目の中に防災教育の要素を盛り込むことを提案している。

1978年の宮城県沖地震、2004年の新潟県中越地震、そして今回の東日本大震災。隣県でこのような大規模な地震災害が発生しているにも関わらず、幸いにも大きな被害を免れてきた山形県。だから大丈夫ではなく、次はもしかしたら、の危機感を持ち続けなければいけないだろう。大切な人を守るためにも、まず自分自身の身を守ることを第一に、今日からできる防災行動について考えてみてほしい。



防災を学ぶ本

東日本大震災からの復旧・復興を支援し新しい東北を創生するために、山形大学・宮城教育大学・福島大学は、交流と連携を進めてきました。その成果をテキストにまとめ、本年9月1日(防災の日)に出版しました。

『東北発 災害復興入門-巨大災害と向き合う、あなたへ-』
編著 / 清水修二・松岡尚敏・下平裕之
発行 / 山形大学出版会 800円(税抜)



「大学院
教育実践研究科
研究室訪問

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 2001年から継続的に取り組んでいる海外技術支援活動。インド、パキスタン、タイなどで技術支援および調査活動を展開している。現地での技術指導にあたり、豊富な知識と経験を惜しみなく伝授する伊藤さん。

2 伊藤さんが校長を務める「地域ものづくりシニアインストラクター養成スクール」は、ものづくり企業のベテラン社員やOBを対象にシニアインストラクターを育成している。その成果発表会・修了式の様子。

3 2002年、カナダでヘリスキーを楽しむ伊藤さん。趣味のスキーでもフロンティア精神を発揮し、だれも滑っていない新雪を求めてヘリスキーが定番に。クレバスに落ちるという危険な経験をしても恐怖心はない。

「世界のホンダ」の創業者を“おやじさん”と呼び、ものづくり精神を後進へ、海外へと伝える。

伊藤洋 東京大学 経済学部ものづくり経営研究センター 特任研究員

「やってみませんか!」本田宗一郎氏がよく口にしたというこの言葉は、上杉鷹山公の名言「為せば成る為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」に通じると語る伊藤洋さん。ホンダの創業者を“おやじさん”と呼び、2輪車からスタートしたホンダの4輪車参入を支えた技術者の一人だ。上杉社社のすぐ近くで生まれ育った伊藤さんは、小さい頃からオートバイなどの機械に興味を持つメカ少年だった。幸いにも本学の工学部が目と鼻の先にあつたため、迷うことなく進学を決めたという。学生時代は、中古オートバイを自分で修理して乗り回したり、蔵王でスキーを楽しんだり、工場での実験のデータ取りやバスの車掌といったアルバイトに奔走したりして、バンカラな日々を過ごした。

精密工学科の第一期生として現在のデジタル産業やロボット、ITの草分け的カリキュラムを学んだ伊藤さんは、先生の的確な指導もあって本田技研工業の入社試験に見事合格。入社後はホンダー筋、実践知を重視する本田社長のもと、4輪部門では後発でありながら創造性と独自性で“ホンダならではの”車を世に送り出し続けた。金型設計や車体生産技術開発プロジェクトなど、さまざまな部署で活躍の後、1989年には同社から生産技術部門として独立したホンダエンジニアリングの取締役に。車体生産開発責任者、品質保証責任者を務め、ボディ戦略を構築。定年退職後は、インド、パキスタン、タイなどでの海外技術支援活動に継続的に取り組んでいる。また、東京大

学、東京理科大学、広島大学など各地の大学で講義を行うとともに、地元米沢市の産業アドバイザーとして市への提言活動を行い、地域ものづくりシニアインストラクター養成スクールでは校長を務めている。さらに、2004年からは東京大学経済学部ものづくり経営研究センター特任研究員として活躍している。

入社式での“おやじさん”の教えの一つ、「自分のために働け」を現在も実践。後進の育成に励みながらも、自身が楽しむことにも一生懸命。大好きなスキーの醍醐味を味わうために欧米のスキー場にまで足を伸ばす。このバイタリティーが日本のものづくり、クルマ産業を牽引してきたのだと納得させられる。先輩の公私に大いに学ぶとしよう。

実践の成果

今回のランナー:



伊藤洋
 いとうひろし●山形県出身。
 1965年山形大学工学部精密工学科卒業後、本田技研工業入社。ホンダエンジニアリングの取締役退職後は技術コンサルタント業務。2004年より現職。



(左から)三田花純、坪井淳史、松本恵実
 みたかすみ●岩手県出身／つばいあつし●埼玉県出身／まつもとえみ●新潟県出身
 食品や生物への関心から農学部に進み、食品・応用生命科学コース永井研究室に所属になった4年生。庄内産の甘エビと庄内米を生かした「Ebi Chocolate」を開発。その斬新な組み合わせとおいしさで注目を集めている。

アイデア、製法、商品名、パッケージデザインまで研究室発「Ebi Chocolate」の開発力はチーム力。

三田花純、坪井淳史、松本恵実 農学部 食料生命環境学科 4年

需要の少ない庄内産甘エビの消費拡大を図り、山形県の水産産業を元気にしようと立ち上がったのは農学部食料生命環境学科永井毅研究室(食品創製科学分野)の4年生、三田花純さん、坪井淳史さん、松本恵実さんの3人。永井教授は、約1年半前に本学に着任してすぐに地域の強みを生かした菓子開発を視野に各方面に働きかけてきた。その第一弾として、山形県には付加価値の高い水産加工食品がないことに着目し、学生たちに「甘エビ」を生かした加工食品の商品開発をテーマとして与えた。当時3年生だった3人は10月からプロジェクトに着手し、実質2カ月ほどで「Ebi Chocolate」の製法を確立し、半年後の今年8月10日から鶴岡市の庄内観光物産館で販売を開始している。

地域色を色濃くするために「甘エビ」に「庄内米」を組み合わせることで煎餅にすることはすぐに決定したものの、お菓子としてのおいしさ、お土産品としてのインパクトの追究にはかなり苦戦を強いられたという。すりつぶした甘エビを混ぜてご飯を炊き、つぶつぶの食感を生かすためにそのまま乾燥させて一口サイズの煎餅に。インパクトのあるプラスαとはなにか、クリームチーズやバタークリーム、わさび、柚子こしょう…さまざまなアイデアを出し合い、試作品を作っては試食の繰り返し。実験室での試行錯誤は深夜に及ぶこともあり、さすがに真夜中の揚げ煎餅、特に失敗作の試食は辛かったと振り返る。アイデアに行き詰まっていた頃、3人で市場調査に出かけた際の車中で「チョコ

もおもしろくない?」そんな会話が交わされ、エビチョコレート案が急浮上。試作品をいろいろな人に食べてもらうアンケートを行い、微調整を加えてようやく完成にこぎつけた。売り場で目立つ色、女性が手に取りたくなる形、煎餅というよりもチョコレートを意識して。パッケージデザインも自分たちで手掛けた。

性格も出身地も違う3人が、意見を戦わせながらも互いを尊重する絶妙のチームワークで達成できた研究室発の食品開発。今回の経験が大きな自信となってそれぞれが希望する業界への就職も決めた。卒業後もしばらくは「Ebi Chocolate」の売れ行きや同研究室の後輩たちの活動が気になる日々が続きそうだ。

結束の成果



1

この実験室で夜中まで試作を重ね、試食を繰り返し、「Ebi Chocolate」を完成させた3人。パッケージデザインも自分たちで手掛けた。売り場でのインパクトを重視し、鮮やかなピンクとチョコレートカラーに。



2



3

これが話題の「Ebi Chocolate」。スイートチョコレートとホワイトチョコレートの2種類。甘エビとお米とチョコレートという意外な組合せから生まれた新しいおいしさ。見た目のキュートさも人気を後押し。

実験室では、昼夜を問わずディスカッションする光景が見られた。お互いに意見やアイデアを出し合い、試行錯誤することで商品化にこぎつけた。3人のチームワークは担当の永井教授も絶賛。

患者さん同士の交流が笑顔を紡ぐ「さくら会」

「さくら会」は、がん患者とその家族が集う交流の場。

お互いの体験や近況などを語り合うことで、不安が解消され、前向きな気持ちになります。



金曜の昼下がり、附属病院内のカンファレンス室に続々と女性たちが集まってきました。「久しぶり」「病院の庭の木がきれいに色づいたね」などと明るい会話が飛び交います。ここは、この病院で治療を受けているがん患者とその家族を対象とした「さくら会」定例会の会場。一昨年の9月に発足し、毎月第2金曜日の定例会に加えて勉強会や各種レクリエーションが随時開催されています。発足当初は看護師長等ががん患者相談室のスタッフ主導で開催されていましたが、現在は患者さん自身が主体となって運営しています。病棟の看護師からの勧めや家族からの誘いなど、参加のきっかけはさまざま。参加したいときだけ参加できる予約もいらぬ自由な会ですから、どんな顔ぶれが集まるかは会が始まってみないとわかりません。

入院中の人や退院して外来診療を受けている人、すでに治療を終えた人、そしてその家族、現状はさまざまでも同じ体験を持つ者同士が集う場は、とても貴重な仲間づくりの場となっているようです。初めて参加した人の自己紹介から始まって、いつものメンバーの近況報告や情報交換などと続き、初めは

言葉数の少ない人も徐々に自身の病状や悩み、不安などを口にするようになります。重い空気に包まれそうになったとき、「私もそうだった。でも、大丈夫だよ」そんな誰かの一言で空気は一変。「私だけじゃない」「みんながんばっているんだ」そんな安心と勇気をもらえる場なのだといいます。また、メンバーの一人が「先日、孫が生まれました」と報告すると、みんなから大きな拍手と「おめでとう」の声。辛いことだけではなく喜びを分かち合う場でもあるのです。

「医師や看護師には話にくいことも、同じ目線、同じ思いの仲間になら話しやすいし、話すことで気持ちが楽になり、前向きになれるんだと思います。みなさん、とてもいい表情になって帰られますよ」と担当看護師長。こうした会の意義や効用は誰もが認めるところ。現在は、女性の参加者がほとんどで男性の患者さんは少し気後れしてしまうようで、将来的には男性だけの会の発足なども考えられます。今後は、よりよい在り方を模索しながら一人でも多くの患者さんに勇気や希望を与えられる会に成長してほしいものです。



院内に掲示されている「さくら会」への誘いポスター。「さくら会」に関するお問い合わせは、下記の「がん患者相談室」まで。



病院の受付カウンター左手にある「がん患者相談室」



「がん患者相談室」では、担当スタッフが親身に対応

山形大学医学部附属病院「がん患者相談室」のご案内

相談室では、がんに関する治療や検査、療養上の悩み、医療費などについて、患者さんやご家族の不安や心配ごとに専任相談員の看護師が対応いたします。なお、がん相談に関する費用は無料です。

受付時間／8:30～17:00

(土日、祝祭日を除く)

相談場所／がん患者相談室

(受付カウンター左手)

相談の方法／対面相談または電話相談

TEL 023-628-5159

日本語チューターを通してグローバル力を身につける

山形大学生を山形大学のサテライトがある海外の協定校に派遣し、無料の日本語教室を開講する「日本語チューター派遣プログラム」を昨年の8月から実施しています。昨年度はベトナムのハノイ農業大学へ延べ31名が行きました。本年度は12月までに、ハノイ農業大学(ベトナム)へ3名、ジョモケニヤッタ農工大学(ケニア)へ5名の学生が出向いており、今後26名の学生と3名の職員の派遣が決定しております。

本プログラムは、各自が日本語の授業を受け持つことを通し、現地の学生との交流により、(1)自分及び自国を知る(2)

相手及び異文化を理解する(3)臨機応変創意工夫できる適応能力を身につける(4)優れたコミュニケーション能力を身につける等のグローバル力を習得することを目的としています。

参加した学生は自分の成長に驚きながら帰国してきます。以下は、報告の一部です。

「最初のうちは英語でうまく授業ができず、悔しい気持ちでいっぱいでした。しかし、私にしかできないことがあると気付き、自分がこのプログラムに参加した意味を見つけることができました。私を支えてくれた現地の学生には感謝の気

持ちでいっぱいです。体力的、精神的にもキツイ時もありましたが、それを成し遂げたことは大きな自信となりました。」

「このプログラムに必要なのは高い語学力ではなく、チャレンジ精神と異文化を認める心です。やってみようという気持ちがあれば、どんなことも楽しく乗り切ることができます。異なる環境や文化を否定せず拒否せず受け入れ認めることで視野もどんどん広がります。そういった体験が出来るのがこのプログラムの魅力だと思います。」



昨年度のハノイ農業大学での授業風景



日本語教室への登録者が150名を越えたハノイ農業大学



本年度はジョモケニヤッタ農工大学へも派遣先を増やしました

学生コーナー

全日本学生ドリフト王座決定戦 全国1位

大学院 理工学研究科
2年 米内寿斗

私は、幼い頃から自動車レースに興味を持ち、「ドリフト」という競技に心を惹かれ、将来ドリフトレースに参加するのが夢でした。

ドリフトというのは、グリップを失った状態で、車を横に滑らせながら走るので、大会では、サーキットで決められた区間において、ドリフト走行中の車の角度、スピード、ラインの美しさ等を競います。全日本学生ドリフト王座決定戦(通称学ドリ)はあまり知られていませんが、ドリフト競技をしている学生はこの学ドリを目指し、この大会で勝つことを目標にしています。



雑誌「ドリフト天国」の表紙を飾りました

大学に入学して車を購入し、山形大学自動車部(米沢キャンパスにあります)に入部したのをきっかけに、本格的にドリフ

トを始めました。大学2年時に初めて出場した学ドリで惨敗しました。その時の悔しさをバネに、この学ドリで頂点に立つことを目標に練習してきました。

大会は、毎年8月に栃木県の日光サーキットで開催されています。月に1回、多いときは月に2回、日光サーキットまで遠征し、ひたすら練習を重ねました。学ドリで勝たなければ、今までドリフトを続けてきた意味などないという気持ちで挑んだ4度目、最後の挑戦で、やっと念願の全国1位を取ることができました。関東の強豪校を抑えて優勝できたことが



念願の一位の表彰台に立つ米内君

東北人としてもとても嬉しく思います。

ここまでこれたのは自分ひとりの力ではなく、今まで支えて下さった方々や応援してくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

自動車部は現在部員不足に悩んでいるので、少しでも車に興味がある方や、一緒に学ドリを目指したい方など、ぜひ自動車部に入部してください!学ドリは自動車部に入らなくても出場することはできますが、ぜひ私たちと一緒に熱い思い出を作りましょう!



副賞として自動車パーツショップで使える商品券ももらいました

式典行事

平成25年度 学位記・修了証書授与式

●農学部

日時／3月17日(月) 11:00～
場所／東京第一ホテル鶴岡(鶴岡市)

●工学部

日時／3月21日(金・祝) 10:00～
場所／米沢市営体育館(米沢市)

●人文学部、地域教育文化学部、理学部、医学部

日時／3月25日(火) 10:00～
場所／山形県体育館(山形市)



卒業研究発表会

地域教育文化学部

学科・コースで行われている研究や活動を知る好機ですので、ぜひおいでください。

入場料／無料

●地域教育学科

日時／2月8日(土) 9:30～

場所／地域教育文化学部1号館

問い合わせ／鈴木研究室

TEL 023-628-4427

備考／研究領域毎に、6つの会場で実施します。今日的な教育課題とその解決方策について知ることができます。

●文化創造学科音楽芸術コース

日時／2月3日(月)、4日(火) 17:00開演
場所／山形テルサ テルサホール(山形市)

問い合わせ／音楽芸術コース 遠藤

TEL 080-6044-1202

備考／3日 ピアノの部

4日 声楽・管弦楽の部

●生活総合学科システム情報コース

日時／2月17日(月)

問い合わせ／中西研究室

農学部

●安全農産物生産学コース

●食農環境マネジメント学コース

▶口頭発表

日時／2月17日(月)午後、18日(火)

場所／農学部3号館3階301大講義室

▶ポスター発表

日時／2月20日(木)

場所／グランドエル・サン(鶴岡市)

問い合わせ／教育研究支援室(安全農産物

生産学コース担当、食農環境

マネジメント学コース担当)

TEL 0235-28-2819

●食品応用生命科学コース

▶ポスター発表

日時／2月17日(月)、18日(火)

場所／農学部3号館1階101講義室、

102講義室、103講義室

問い合わせ／教育研究支援室

(食品・応用生命科学コース担当)

TEL 0235-28-2819

●植物機能開発学コース

▶口頭発表

日時／2月17日(月)午前

場所／農学部3号館3階301大講義室

▶ポスター発表

日時／2月17日(月)、18日(火)

場所／農学部3号館1階101講義室、

102講義室、103講義室

問い合わせ／教育研究支援室

(植物機能開発学コース担当)

TEL 0235-28-2819

●森林科学コース

▶ポスター・アピール(口頭によるポスター
概要説明)およびポスター発表

日時／2月19日(水)

場所／農学部3号館3階301大講義室、

同館1階101講義室、102講義室、

103講義室

問い合わせ／教育研究支援室

(森林科学コース担当)

TEL 0235-28-2819

●水士環境科学コース

▶口頭発表

日時／2月19日(水)午後

場所／農学部3号館3階301大講義室

問い合わせ／教育研究支援室

(水士環境科学コース担当)

TEL 0235-28-2819

見つめて!感じて!
サイエンスマジック!

Be★らほ!

山大サイエンスカー



FRI (第1週)
21:00 - 21:30

Twitter、
Facebookも
始めました!!

県内の中学生に、最新の科学をわかりやすい実験を通じてご紹介!
生徒達に流行していること、学校の取り組みもインタビューします!

(出演) 栗山恭直(山形大学理学部教授)、大屋香里(エフエム山形アナウンサー)

(周波数) 山形 80.4MHz 鶴岡 76.9MHz 新庄 78.2MHz 米沢 77.3MHz

Rhythm
Station
www.rfm.html

山形大学の行事・催事のご案内です。
地域に根ざした大学としてみなさんのご参加をお待ちしています。

公開講座等

理学部

小さな科学者 体験学習会 マイナス200度の世界

日時／3月8日(土) 13:30～15:30
場所／SCITA(サイタ)センター
(山形大学理学部1号館1階)
対象／小学4年生～中学生およびその保護者
20組
参加費／無料
問い合わせ／理学部事務室
TEL 023-628-4505

工学部

第5回 6学部対抗雪合戦大会

日時／2月8日(土)
場所／工学部グラウンド(米沢市)
問い合わせ／工学部学務課学生支援担当
TEL 0238-26-3017

農学部

第3回(冬)森の学校

日時／2月1日(土) 8:45～16:00
場所／農学部附属やまがたフィールド
科学センター上名川演習林(鶴岡市)
参加費／500円
対象／小学校3年～6年生
問い合わせ／農学部事務室(附属施設担当)
TEL 0235-24-2278



附属幼稚園

お兄さんお姉さんと 一緒に遊ぼう!

日時／1月16日(木)
10:15～11:30(10:00～受付)
場所／附属幼稚園
参加費／親子一組200円
対象・人数／2～3歳児親子 20組
問い合わせ／附属幼稚園
TEL 023-641-4446

男女共同参画推進室

理系ライフをのぞいてみよう! サイエンスカフェ in 山形大学

日時／1月25日(土) 14:00～16:00
場所／小白川キャンパス理学部13番教室
参加費／無料
対象・人数／中学生以上ならどなたでも
20名
問い合わせ／男女共同参画推進室
TEL 023-628-4937

その他

藤沢周平の江戸・東京

藤沢周平氏の作品の主要な舞台となった江戸の面影残る東京で、文学散歩と藤沢文学研究者による講演会を実施します。
日時／2月28日(金) 13:00～16:10
場所／大正記念館
(東京都江東区清澄3-3-9)
問い合わせ／TEL 023-628-4008

平成25年度 山形大学OB・OGセミナー

交流会のほか、農学部小山浩正教授による講演、山大OG講師・宝井琴柑氏による講談を予定しております。
日時／3月1日(土) 10:00～14:40

場所／山形大学東京サテライト
キャンパス・イノベーションセンター1階
国際会議室(東京都港区芝浦3-3-6)
対象／山形大学卒業生
問い合わせ／TEL 03-5440-9071

キャンパス・イルミネーション

小白川キャンパス イルミネーション

今年で8年目となる小白川キャンパスのイルミネーション。1万球のLED(発光ダイオード)が彩り豊かに輝いています。
期間／12月2日(月)～2月末
場所／小白川キャンパス正門ロータリー
点灯時間／12月 16:30～21:00
1、2月 17:00～21:00



印刷だけじゃない、田宮印刷。

TAMIYA
Graphic Communication

田宮印刷株式会社 山形市立谷川3-1410-1 ☎023-686-6111 www.tamiya.co.jp



広告掲載ご希望の方は、総務部広報室までお問い合わせください。TEL. 023-628-4010

地域に根ざし「有機エレクトロニクス」で世界をリードする先端技術の実証モデル拠点

「山形大学有機エレクトロニクス
イノベーションセンター」開所式

今年4月、米沢市オフィス・アルカディアにオープンした「山形大学有機エレクトロニクスイノベーションセンター」の開所記念式典および記念講演会を9月13日(金)に行いました。本センターは「夢からビジネスへ」をキャッチフレーズに、大学・企業・公的機関が連携し、有機エレクトロニクス分野の実証化研究を行い、実用化・産業化を推進するとともに、それら技術の高度化に対応できる人材の育成を目的として設立されました。

本センターでのテープカットおよび内覧会には、吉村山形県知事や安部米沢市長、企業関係者等およそ370人が出席しました。内覧会では大場センター長の説明とともに、有機エレクトロニクスを応用したさまざまな機器が展示されているコーナーを巡り、研究開発が行われているクリーンルーム等を特別に見学しました。

開所記念式典では、結城学長から、本センターが地域産業や大学のあり方にも大きな意味をもたらすことを確信するとの挨拶があり、経済産業省の安永審議官からは、新たな産業創出のために関係者の今後の活動に期待する旨の祝辞がありました。続く記念講演会は科学技術振興機構小原理事の挨拶に始まり、産業技術総合研究所の中鉢理事長による基調講演の後、有機エレクトロニクスの研究者による最新技術等が紹介され、最後に城戸教授が研究内容や現在進行しているプロジェクト等の紹介を行いました。

Innovation Center for Organic Electronics
INOEL

1.山形大学有機エレクトロニクスイノベーションセンター全景 2.テープカット 3.展示コーナー 4.内覧会風景 5.開所記念講演会でセンターの紹介をする大場センター長



編集後記 Editor's Note

今号も、山形ドキュメンタリー映画祭の収蔵作品を素材にして大変貴重な研究書を出された人文部の先生方の座談会、備えは万全かを問う村山良之教授の防災教育の取り組み、本田宗一郎氏から直接教えを受けた伊藤洋さんのお話、がんとう上手につきあうために仲間と語り合う医学部の「さくら会」について、「Ebi Chocolate」を開発した農学部の学生チームの頑張りなど、バラエティーに富んだ内容となっております。工学部ご出身の伊藤洋さんからは、心に響くメッセージをたくさんいただきましたが、その中の「本質を考えたモノづくりが重要」という考え方は、みどり樹を作っていく上でも、通じるものがあると感じました。読者の皆様にも読んでいただけたらと思います。今後ともご愛読いただきますよう、何卒よろしくお願いたします。

(みどり樹編集委員会委員 M.M)

今号の
表紙

「映像の中の冷戦後世界」を共著した3人の研究者が、映画祭やそれぞれが専門とする国々の歴史的背景やドキュメンタリー映画事情等について語り合った座談会の様子。司会の阿部先生の進行のもと和やかに会話が弾んだ。

●この「みどり樹」は山形大学ホームページでもご覧になれます。

山形大学 みどり樹 | 検索

●「みどり樹」に対するご意見・ご質問等をお気軽にどうぞ。

E-mail: koho@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

●「みどり樹」は、3月、6月、9月、12月に発行する予定です。

— 地域に根ざし、世界を目指す —



山形大学ホームページ <http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>